

公益財団法人日本文化藝術財団 「創造する伝統賞」過去の受賞者
＜その他＞

2011年度 受賞

フジマ カンジュウロウ

藤間 勘十郎

【肩書き】歌舞伎舞踊振付師、日本舞踊宗家藤間流八世宗家

【分野】古典芸能および舞台芸能

日本舞踊宗家藤間流宗家。高校卒業後より歌舞伎の振付師としても活動し、若手俳優への舞踊指導を行っているほか、苫船（とまぶね）の名前で作詞・作曲・脚本も手がけている。また、朗読劇の演出なども積極的に行っている。

【選評】歌舞伎振付の家に生まれ、その伝統の技を継承し、若年ながら第一線で活躍している。また舞踊家として古典の技法を生かした新作を発表し、マイヤプリセツカヤや梅若玄祥など分野を超えた共演でも力を発揮している。さらには「趣向の華」という自主公演を続け、次代を担う若手歌舞伎俳優の育成に積極的に取り組んでいる。自ら筆を執って脚本を書き、演出、振付はもちろん演奏にも参加するプロデューサーとしての力量は格別である。30代という将来性と日本の伝統芸能を推進する精力的な活動への期待から、ここに「創造する伝統賞」に選考する次第である。

2015年度 受賞

マユヤマ コウジ

繭山 浩司

【肩書き】美術古陶磁復元師

陶磁器を鑑賞し使用する文化は古くから大切にされてきたが、破損などにより鑑賞や使用に堪え難くなってしまった貴重な陶磁器も多く存在する。修復により本来の魅力を復元し、後世に伝えてゆくことができればと修復の仕事に携わっている。修復された陶磁器は日本各地の美術館に展示、また国内外のコレクターに所蔵され、現在までに5000点を超える修復を完了している。2015年には佐賀県立九州陶磁文化館所蔵の鍋島色絵芙蓉文大皿の修復を完成させ、2016年の特別企画展「日本磁器誕生」で修復に関する特別記念講演を行った。

【選評】繭山浩司は多くの陶磁器の修復を手掛けてきた。中国の宋、元、明などの古典的陶磁器、日本の様々な時代の陶磁器、そして近年では板谷波山の「海水着少女像」の修復などで大変注目される修復技術者である。修復は現状保存ということが基本だが、展示公開するということを考慮するとそれだけでは済まされない。残された実物と、修復によって付加された部分を厳密に区別し、それがハッキリと分明されるように記録したうえで、ヴィジュアルとして耐えうるものにしていかなくてはならない。そのためには修復技術は言うまでもないが、美術、工芸の幅広い知識、見識が要求される。その点、繭山は大変高い水準の修復を行ってきた。さらに後代に受け継いでいってほしいものである。

2016年度 受賞

アオキ ヨシアキ

青木 芳昭

【肩書き】美術家(技法材料学)、京都造形芸術大学教授

【分野】絵画技法材料学

1953年生まれ。1976年 パリ留学、ル・サロン名誉賞受賞。1977年 中央美術研究所主宰（2013年退職）。1983-84年 パリ留学。1989年 安井賞展出品。1991年 東京セントラル美術館油絵大賞展出品。1996年 銀座資生堂ギャラリー個展。1997年 安井賞展出品、NHKハート展出品。1999年 アカデミア・プラトニカ設立・代表。2007年 京都造形芸術大学客員教授。2011年 京都造形芸術大学教授、「よくわかる今の絵画材料」出版。京都技法材料研究会会長。2015年 寺田倉庫PIGMENT（ピグモン）顧問、21世紀鷹峰フォーラム研究協力「絶滅危惧の素材と道具」で害獣の鹿の皮から和膠の復刻、毛から筆・刷毛の道筋を築く。

【選評】青木芳昭氏は、洋画制作を通して、絵画及び工芸の様々な素材や道具を研究してきた。近年では、日本の文化芸術の発展に必要な不可欠な素材である「和膠」の復刻を主に、絶滅の危機に瀕する素材や道具を復元・死守する活動を行っている。和膠が2010年に生産が停止されたことによる、絵画制作はもとより修復の分野でも欠かせない素材が手に入らなくなるという衝撃は記憶に新しい。青木氏は、素材や道具という表舞台には出ないが日本の伝承・伝統を支えている分野において重要な役割を果たしている。また、教育現場においても、これらの研究を若い世代に伝え、新たな担い手を育てるとともに、今後の文化・芸術の創作的活動にも寄与するものと期待し、高く評価する。（唐澤昌宏）

2018年度 受賞

クスマ ナオキ

久住 有生

【肩書き】左官親方

【分 野】左官

祖父の代から続く左官の家に生まれ、幼少の頃より鋺を握る。18歳で親元を離れ、各地で修業し、23歳で久住有生左官設立。ドイツ、フランス、日本（京都）などで左官技術を磨き、歴史的建造物の修復の仕事にも携わる。商業施設や教育関連施設、個人邸の内装や外装を手がけることも多く、伝統的な左官技術とオリジナリティ溢れるアイデアが国内外での大きな評価につながっている。

【選評】久住有生の仕事は幅広い。伝統建築の保存修復では先人の技を継承し、個人住宅や商業施設、教育機関などの多彩な空間を彩り、またアートワークも積極的に行っている。海外で積極的に仕事を行っているのも特徴で、それらは日本の文化・芸術を国外に伝える功績を果たしているだけでなく、現地の素材の適用などを通じて、伝統を創造的に鍛える営みともなっている。左官職人の三代目に生まれた彼は、その職が可能な領域は今も拡張しうることを、身をもって示しているのだ。これは自然の素材を繊細な手業で扱うことで、さまざまな現場で物の意味を決定的に変容させる協働者としての左官職人の本質を、現代に息づき調和するものとして発展・創造しているものと捉えられ、まさに「創造する伝統賞」に相応しいと認められる。（倉方俊輔）

2020年度 受賞

ムラタ マサユキ

村田 理如

【肩書き】美術工芸品コレクター、清水三年坂美術館館長

【分 野】工芸

1950年、京都生まれ。1980年代後半、出張先のニューヨークのアンティーク店で幕末の印籠と出会ったことをきっかけに、幕末・明治を中心とする日本の細密工芸を収集。海外に流出していた優品を多数買い戻す。2000年9月、収集品を展示公開するため、京都市東山区に清水三年坂美術館を開設。同美術館は、幕末・明治の七宝・金工・蒔絵・京薩摩・刺繍絵画を常設展示する日本で初めての美術館として、本年開館20周年を迎える。自館展覧会の開催に加えて、講演会への出演や他館展覧会への出品、書籍・番組掲載への協力等をとおして幕末・明治の工芸の魅力を広く伝え、その再評価に尽力し、保存・継承へとつながる活動を続けている。

【選評】氏は、長年にわたり七宝、金工、漆工、木彫、牙彫などの明治工芸を収集し、研究書を上梓してこられた。2000年には、京都に清水三年坂美術館を開館し、明治工芸の魅力を多くの人に伝えるべく尽力されている。そもそも明治工芸の多くは、欧米の万博などに出品されたものが多く、国内に留まっている優品は少なかった。氏は、海外のオークションなどを通じて積極的に買い戻し、明治工芸の再評価に大きく貢献された。近年、村田コレクションを中心とした明治工芸の展覧会が全国巡回し、「超絶技巧」というキーワードは広く認知されることとなった。また、村田コレクションに触発された若い工芸作家たちも続々と頭角を現しており、まさにこの創造する伝統賞にふさわしい貢献をされてきたのである。（山下裕二）

2022年度 受賞

カブシキガイシャクサカンムリ

株式会社 くさかんむり

【肩書き】茅葺き職人

【分 野】建築・芸術

くさかんむりは、神戸市北区淡河町を拠点に、伝統的な茅葺きの修復から、現代的な茅葺きへの挑戦、より多くの方々に茅葺きを知ってもらうためのワークショップやセミナーを開催。建物だけにとどまらず、様々な方向から茅葺きの持つ可能性や魅力を探り、引き出し、磨き上げて、今を生きる人達にお届けするという目的を共有した 職能集団です。

【選評】茅葺き職人として伝統的な技術を継承しながら、新たな形でその可能性を展開している。「茅葺き」という言葉を耳にしたことがあっても、独特の素材感を目の当たりにした方が、どれほどいるだろうか。従来のフォームで屋根を葺くだけではない彼らの実践は、リアルな空間を通じて一人ひとりの心に訴えかけ、集いを生み出す茅葺きの力を開示している。そして、現前させられた美しさは、我々が自然の循環の中にある、あるいは、あるべきではないかという事実を喚起する。このように実用面や環境性能面から茅葺きを再評価していることはもちろん、地球環境へと思いを馳せられるといった機能も射程に入れている点に、現代の芸術としての特性がうかがえる。国際性や展開性も十分に備えており、今後の活躍が一層期待される。（倉方俊輔）